



# 日本に関心の高い女性を「食」をテーマとしたツアーに招き、海外に発信！

(一財)自治体国際化協会交流支援部経済交流課 今井 秀敏

## ツアー開催経緯

クリアでは、2016年度の韓国での事業を皮切りに(株)ABC Cooking Studio(以下、ABC社)と連携し、中国やシンガポールにおいても、日本の食文化に関心を持つ消費者に向けて、料理教室を通じた日本の地方の魅力発信事業を実施し、大変好評を博しています。

そこで、2018年度は取り組みをさらにステップアップさせ、日本の食文化や日本旅行などに高い関心を寄せる消費意欲旺盛な若い一般女性消費者を、地域の「食」をテーマとした日本国内ツアーに招へいし、フィードバックを得つつ、ツアーの様子をSNSや各種メディアで発信することで地方自治体の海外販路開拓やインバウンド促進につなげる事業を実施することとしました。

食の魅力に加えて地域の観光スポットや伝統工芸、地域交流などを横断的に組み合わせる発信することができる点がこの事業の魅力です。

## 初めてのツアーは香川県・三豊市で

第1回目となるツアーは、開催自治体として香川県および香川県三豊市を選定し、2018年7月11日(水)～14日(土)の日程で実施しました。

ABC社のシンガポール教室に通う20～40歳代の講師と生徒の計6人が参加。すでに10回ほど来日経験のある方もいましたが、皆さん香川県訪問は初めてのことでした。

高松市では、特別名勝・栗林公園を訪問。園内で浜田香川県知事による歓迎を受け、抹茶を体験しました。参加者は庭園のベストスポットを探して撮影し、さっそくSNSへアップしていました。翌日は小豆島へ移動し、オリーブ公園、オリーブ栽培とオリーブオイルなどの加工・製造を行う井上誠耕園などを訪れた後、三豊市へ移動しました。



三豊市のうどん打ち体験施設「UDON HOUSE」にて体験をSNSで発信

三豊市では最初に、地元のレモンを使った商品を製造・販売している店を訪問しました。市の担当者が「アルコール度数が高いリキュールなので冷凍庫に入れても凍りません。キンキンに冷やして楽しんでください」と説明したところ、追加で購入する参加者が現れ、商品説明の重要性を肌で感じました。移動中の車内でも、担当者が地元の有名かき氷店を紹介したところ、参加者がぜひ訪れたいとのことで急ぎよ立ち寄ることとなり、口コミの威力も目の当たりにしました。仁尾酢蔵では、シンガポールに酢や醤油・お酒を造る工場が無いことに加え、レトロな外観も相まって、参加者は興味津々でした。

この日の最後には、水鏡に映った写真が撮影できるインスタ映えスポットとして話題の父母ヶ浜を訪問。参加者はかなりの時間を写真撮影に充てていました。この父母ヶ浜ですが、遠浅で海水浴に向かず、以前はお客さんが少なかったそうです。観光客のニーズに合った新しい価値を戦略的に発信することで、外国人を含めた多くの観光客が訪れ、地元も驚いているそうで、アイデアやきっかけ次第で集客ができる良い事例と言えます。さらに夕食ではテーブルを使った創作デザート作りに参加者から歓声があがっていました。

ツアー3日目は三豊市に新たに誕生した、讃岐うどん文化を学びながら地域を楽しむ体験・宿泊施設 UDON HOUSE からスタートしました。全国のうどんと讃岐うどんの違い、だしの味の違い、文化的背景などを外国人講師から英語で丁寧に説明を受け、悪戦苦闘しながらもとても美味しいうどんを作り上げていました。また、だしの説明でいりこに興味を抱いた参加者の意向で急ぎよ地元の農産物直売所を訪問し、結果として直売所が、全行程を通じて一番購入量が多いショッピングスポットとなりました。その後行った桃狩りは、シンガポールでは体験できないということもあり、参加者から体験料についての問い合わせがあるなど関心が高く、観光コンテンツとして需要があることが確認できました。一行はその後琴平町、直島を回り、高松市で伝統工芸の水引を体験、香川県名物の骨付き鶏のお店で夕食をとり、帰国の途に就きました。

## 食の魅力満載の北海道十勝地区

第2回目のツアーは北海道十勝地区にある音更町、芽室町、池田町3町合同で2018年10月10日(水)～12日(金)の日程で開催しました。最初の訪問地である芽室町ではサイクリング、十勝平野が一望できる展望台での昼食、直売所訪問、ゴボウ収穫体験など、随所で参加者の楽しそうな姿を見ることができました。

続く池田町では、地元の生産者から直接農産物を仕入れ、地元池田町で生産された産品のみが盛られたプレートを提供する居酒屋で夕食をとりました。夕食会場に駆



池田町産品だけが盛られたプレートを囲んで生産者から丹精込めた農産物であるとの説明を伺う。

けつけていただいた生産者から、2年間熟成させたジャガイモなど、各産品は丹精込めて作られたものであるとの説明を受け、参加者全員満足した様子でした。

翌日は朝から牧羊犬が羊を誘導するショーを鑑賞しました。移動途中に、観光地化されていない白樺の小道が町の担当者から紹介されたところ、全員がたくさんの写真を撮影し、また、雨でブドウ収穫が中止となったにも関わらず、雨の中長時間ブドウと自分の撮影を行っていたことから、インスタグラム投稿を目的として訪れる旅行者は、自分と被写体の距離が近く、静止しているコンテンツを望んでいるのかもしれない。

池田町の観光名所ワイン城、牧場直営のジェラート店でのチーズの昼食、羊の人形作りといったコンテンツの中で、皆さんは通訳の方を介して、地元の方との会話をとても楽しんでいました。今後FITの受け入れを考えるうえで、地元住民と直接会話できる機会や場をいかに確保するかを考えておくことが重要ではないでしょうか。

前日のうちに最後の開催地、音更町の十勝川温泉に移動した一行は、早朝からガーデンスパ十勝川温泉でホットヨガを体験し、着衣で温泉入浴できるスパと合わせて、ゆったりした時間を過ごされたようでした。同施設での料理体験では、ボールを転がして作るアクティビティ要素を取り入れたアイスクリーム作りで大興奮でした。

## 大事なことは地元の人との交流

2回のツアーを通じて、海外の若い女性の日本に対する高い関心を間近で確認することができました。そして、このようなツアーを実施するうえで一番大事な点は、地元のホスト精神溢れる方と交流の機会を持つことだと感じました。ただ触れ合い、案内をするのでは足りません。文化的背景やストーリーを、前提知識が違う外国の方にわかるような表現で伝えられるよう注意することが必要です。そのような受け入れをするためには、通訳の方と事前に詳細な情報を共有しておくこと、そして地元事業者や自治体担当者など、地元の方々が熱意をもって接することが重要であると思います。

なお、本ツアーについてはプロモーション動画を作成し、海外のABC社教室のサイネージにて周知・拡散を行いました。クリアHPに放送された動画とツアーの詳細が掲載されておりますので、ぜひご覧ください。

<http://economy.clair.or.jp/activity/seminar/>